

保水・断熱の新工口建材

保水性などに優れた新しいセラミックス建材を校舎外壁に取り付け、夏場の冷却効果や壁面の緑化について調べる実証試験が名古屋市中昭和区の名古屋工業大で行われている。建材は、多治見市の研究機関やタイルメーカーが共同開発。実用化に向けて、データを集める。(内田 由紀子)

多治見の会社など共同開発

建材は「多孔体セラミックス」。超軽量で保水性のほか、断熱性や防音性、加工性にも優れている。多治見市陶磁器意匠研究所や同大セラミックス基盤工学研究センター(多治見市)の高橋・藤研究グループ、ヤマセ(同)、東陶マテリア(土岐市)が共同開発した。ほとんど砂に近く、窯業原料に使えないため、従来は埋め戻すしかなかった未利用資源を使用した。製造過程で気泡を入れる同大の特許を用い、一瞬程度の気孔が連続してつながった構造を持つ。このため軽く、保水性や断熱性などの特徴が備わっている。

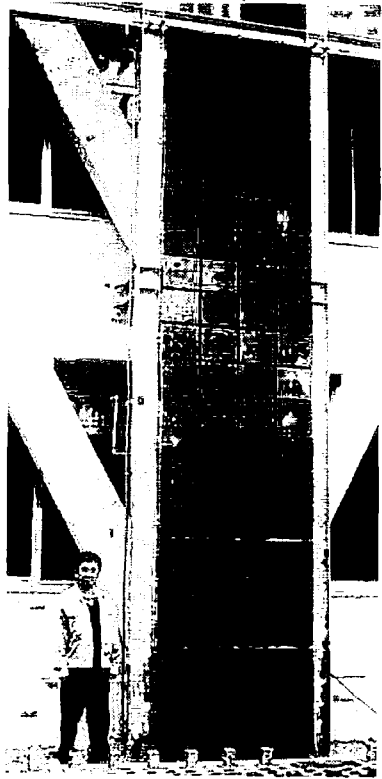
試験は同大十九号館の耐震補強工事に合わせて二月から実施。八十四枚のタイルをつないで幅約一・二メートル、高さ約六メートルの壁面をつくり、七本を南側の外壁に取り付けた。うち四本には穴を開け、

壁面緑化 名工大で実証試験



植物「タマリユウ」を植えた。すべての壁には自動給水装置を設置。一本で最大百四十リットルの水が見込まれる。同じ建材を使ったこれまで

他の実験では、気化熱により平均して二、三度下がったという。建材は未利用資源の使用とともに製造過程でも環境負荷の低減に配慮。また、使用によってヒート



トアイランドの緩和や暖房、冷房の抑制も期待され、開発に加わった多治見市陶磁器意匠研究所の加藤昌宏さん(50)は「地球に優しい製品を作りたい」と話していた。

平成18年3月9日(木)
朝刊新聞 16面(東濃版)